

## Ⅳ 考 察

### 1. 条 坊

西隆寺は平城京右京一条二坊九・十・十五・十六坪の4町を占めていた。寺地を囲む条坊道路は東西南北の順に、西二坊坊間路、西二坊大路、一条条間路、一条北大路であった。また、西隆寺造営以前には寺地を4等分する形で、南北に西二坊坊間西小路、東西に一条条間北小路が通っていた。

これまでの西隆寺関係の報告書では、条坊遺構の考察に推定条坊計画線が用いられている。これらは以下の仮定のもとに算出されたものである（『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺、1990、『報告書1993』）。

- 1) 条坊計画線の振れを南北方向は $N0^{\circ}19'50''W$ 、東西方向は $W0^{\circ}18'58''S$ とする。
- 2) 南北方向の計画線では朱雀門心（ $X=-145,994.50$ 、 $Y=-18,586.32$ ）を基準とし、東西方向の計画線では玉手門心（ $X=-145,753.54$ 、 $Y=-19,093.26$ ）を基準とする。
- 3) 1坊=1500大尺=1800尺、1尺=0.296mとする。

今回の調査で検出した条坊関連遺構は、一条条間北小路、西二坊坊間西小路とそれらの両側溝である。これらと周辺の条坊関連遺構との位置関係について以下に記す。なお、計算には上記の仮定条件を用いた。

まず、一条条間北小路についてである。第299次調査のSF692、SD690、SD691がそれぞれ一条条間北小路、南側溝、北側溝であると考えられる。第299次調査の東の第212次調査で検出した1対の東西溝SD452・451はそれぞれSD690・691の延長上にあり、一連であるとみなせる。第299次調査では北側溝の北肩は検出されていないが、両側溝の心々間距離は6.8~8.5mと推定され、条間小路の規模として妥当である。また、この道路の東の延長上には西隆寺第1次調査で検出した東門が位置する。門心は路心から計算上9cm北にずれるだけであり、東門は小路に合わせた位置に建てられたと考えられる。なお、東門心の座標は $X=-145,077.84$ 、 $Y=-19,399.07$ である（『報告書1993』）。路心（両側溝の心）の実測値は、第299次調査区内で南北両側溝が並んで検出されている $Y=-19,519.00$ で $X=-145,078.59$ である。この点と東門心を結ぶ直線は一条条間北小路心と考えられるが、その直線式は次のようになる。

$$X = \tan 0^{\circ}21'30'' Y - 144956.525$$

遺構と推定条坊計画線との位置関係は次の通りである。上記のように $Y=-19,519.00$ では、遺構の実測値は $X=-145,078.59$ である。これは条坊推定計画線による計算値 $X=-145,089.88$ から11.29m（約38尺）北に位置する。この差は大きいですが、現時点では周辺の条坊遺構の検出件数が極めて少ないため原因が不明であり、今後の調査による解明が期待される。また、一条条間路の場合は『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』（奈良市、1991）によると、遺構が推定計画線より13.4m（45.2尺）北である。この原因については、西隆寺に南面する一条条間路を西隆寺側に拡幅したためと考えておきたい、とされている（『報告書1993』）。

次に、西二坊坊間西小路についてである。今回の調査のSF105がこれにあたる。第299・306次調査のSD095が東側溝に、第306・309次調査のSD110が西側溝に相当する。西隆寺第3次調査（金堂地区）で検出したSF105に続く部分であり、西側溝は奈良市第207次調査で検出したSD03へつながら

る。なお、『報告書1993』では、西二坊坊間路は推定条坊計画線通りに施工されていたが、西二坊坊間西小路は推定条坊計画線よりも5.22m (17~18尺) 西に、西二坊大路は推定条坊計画線よりも7.79m (26尺) 西に施工されていたと報告されている。

以上のように今回の調査によって一条条間北小路が確認され、その位置が推定よりも北にあり、東門がこの小路に合わせて建てられていたことが明らかになった。また、過去の2つの調査で検出していた西二坊坊間西小路の延長部分が確認された。

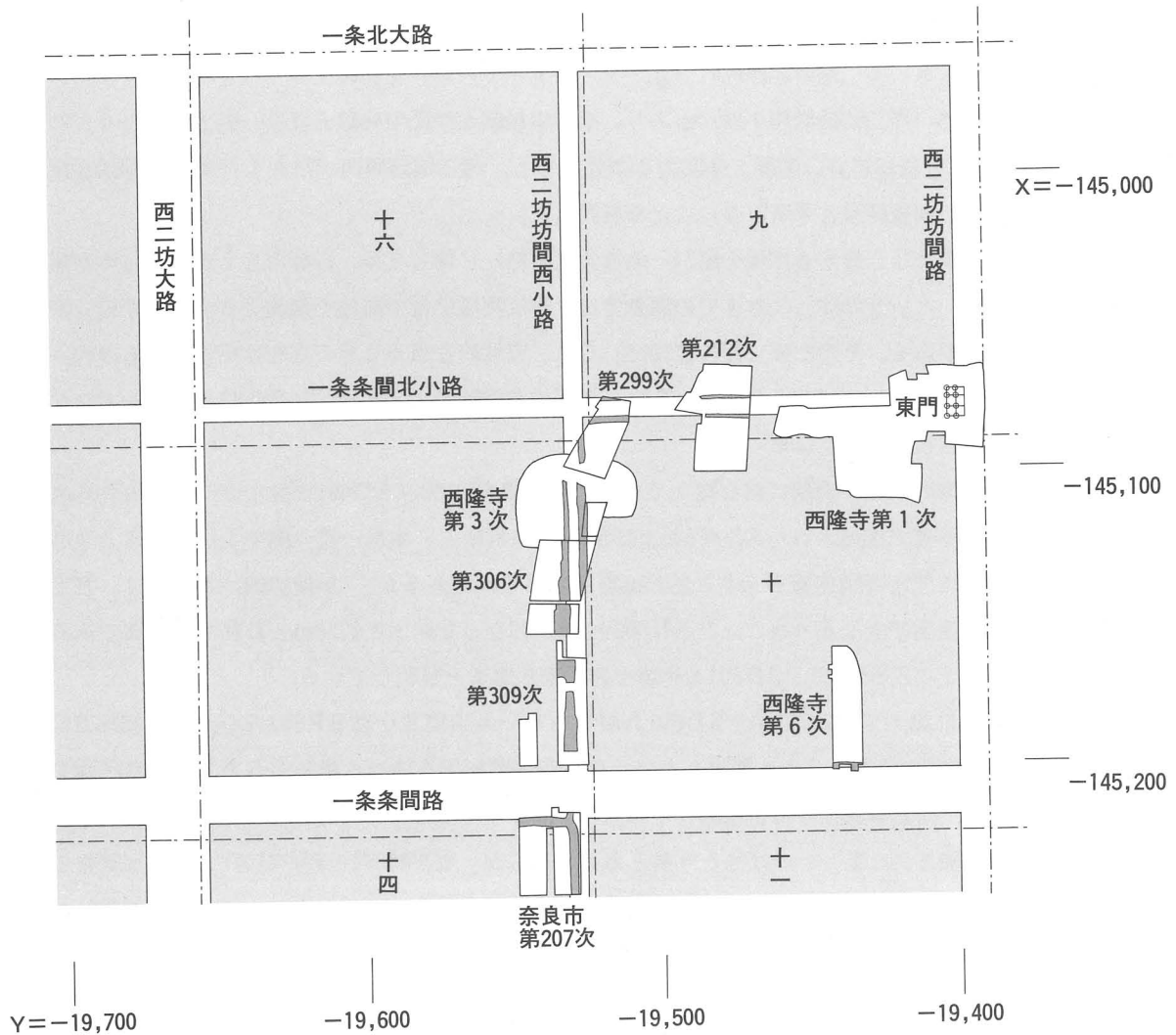


fig.23 条坊復原図(一点鎖線は推定条坊計画線) 1:2500

## 2. 西隆寺伽藍

今回の北面回廊・金堂地区（第299次）、金堂・中門北地区（第306次）、中門・南門地区（第309次）は西隆寺伽藍のほぼ中央を縦断し、西隆寺期では、北面回廊から南に金堂、中門、南門それぞれの遺構が見つかることが期待された。しかし実際は後世の削平が激しく、わずかに北面回廊と灯籠遺構、瓦敷の痕跡しか検出できず、『報告書1993』の伽藍解釈を大きく変更するような段階にまでは至らなかったのが現状である。以下では、わずかに得られた新知見から西隆寺伽藍に関する考察を試みたい。

### （1）西隆寺造営以前の条坊区画との関係

まず、西隆寺伽藍を考える上で重要な関係にある西隆寺造営前の条坊区画について再考する。西隆寺伽藍の寺域が右京一条二坊の北西四町（九・十・十五・十六坪）を占めていたこと、四町を東西に二分する坪境小路（西二坊坊間西小路）があり、その中軸線が伽藍中軸線とほぼ一致することなどは知られていた（『報告1976』）。実際、今回の3調査区でも、西二坊坊間西小路および東西両側溝を検出し、これまでの調査結果と矛盾しないことが判明した。

さて、四町を南北に二分する坪境小路（一条条間北小路）に関しては、以前からその存在自体が問題視されてきた。というのは、これまでの調査では、想定坪境位置で道路や側溝などの遺構が見つからなかったからである。そのため『報告書1993』では、史料的な点からその存在は指摘したものの、西二坊坊間西小路に比して何も言及していない。今回の北面回廊・金堂地区は想定位置を含んでいたが、その付近で何も検出できなかった。

一方、北面回廊の側柱の両側に筋を揃えて東西に走る溝SD690、SD691が見つかった。これらはそれぞれ調査区外東で検出されたSD452およびSD451に対応し、本来一連の溝であったと考えられる。これらの溝は想定坪境位置から北に約15m寄っているのであるが、『年報1999-Ⅲ』では、想定坪境位置に何も検出できなかったこと、SD690とSD452などを結ぶと約50mと非常に長い溝であることなどから、これらSD690、SD691を坪境小路の南北側溝と解釈している。

ここではそれに加えてSD690AとSD691の間にある一条条間北小路SF692の心が北面回廊SC450の心とほぼ一致するという点を強調したい。西隆寺伽藍配置を決める際にそれまでの条坊区画を利用したことは、南北中軸線で条坊道路心と伽藍心を同じくすることからも明らかである。東西を二分する南北中軸線だから等しいのは当たり前と考えられるが、東が440尺と西が410尺と規模が異なる点まで等しくするというのは、それらに相関関係を見出さざるをえない。したがって東西中軸線においても同様の相関関係があると考えても不自然ではなからう。北面回廊心は想定坪境位置よりも北にずれているが、東門の心と合致し、西隆寺の東西中軸線であることは確実である。これにSF692の心も等しくなるということは、奈良時代初頭の条坊区画を決める段階で、すでに何らかの理由で坪境小路の位置が北にずれていたことを示すと考えられる。

ただしSD451、SD452の東延長部を東門付近では検出していない点が問題点として残る。これまで東門付近では西隆寺以前の遺構として南北溝SD005や東西溝SD007を検出している。だが、SD007は東門から西へ延びる寺内道路の南にある東西溝で、SD452の約6.5m南に位置する。一方SD007とほぼ直交するSD005の下層も西隆寺造営以前にさかのぼると考えられている。これらから、SD452から鍵の手に折れてSD005下層、SD007につながると解釈することも可能だが、少々無理がある。

その他、西二坊坊間西小路の西側に関して、遺物の出土状況から工房施設の存在が暗示された。これにより、金堂・中門北地区で検出したSD751・SD752については、条坊区画との関係性は見出せなかったが、同時期のSD110Bの改作にともない整備された区画施設に関係する遺構という可能性がでてきた。結局、今回の調査成果によって、いくつかの問題や可能性は残るものの、西隆寺の変則的な伽藍配置が造営以前の条坊区画に規定されることはほぼ確実となった。

## (2) 灯籠遺構と伽藍配置

前述の通り、西隆寺期の遺構で伽藍に関する新たな見解を導く材料は『報告書1993』と比較して、灯籠遺構SX750、瓦敷SX760しか検出されなかった。そこで、以下では特に灯籠遺構に焦点を当て、灯籠が伽藍のどの要素と密接に関係しているか、西隆寺伽藍の場合もふまえて考察したい。

これまで見つかった主な古代寺院の灯籠遺構例は以下である (tab. 4)。現在、灯籠本体が残存するのは当麻寺と東大寺大仏殿で、大半は灯籠基壇や基壇痕跡のみが検出された。およその時代順に並べたが、本稿では「伽藍配置」および「金堂規模と灯籠一金堂間距離との関係」の2点に注目した。

### ① 灯籠と伽藍配置との関係

古代寺院の伽藍配置は、飛鳥寺式から始まり、四天王寺式 (山田寺式) - 川原寺式 - 法隆寺式 (法起寺式) - 薬師寺式 - 大安寺式と変遷することが知られている (森郁夫『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局, 1998)。加えて、奈良時代に登場する国分寺式は大安寺式に類似する形式である。詳細は省くが、中門の両妻から始まる回廊内で閉じられた空間内が左右対称となるのは、飛鳥寺・四天王寺式 (山田寺式)・薬師寺式・大安寺式 (国分寺式) および興福寺中金堂・東大寺大仏殿などで、灯籠痕跡が見つかったのはいずれもこの形式である。また、当麻寺の場合も回廊で囲まれてはいないが、中門・金堂・講堂の中心を通る中軸線上に灯籠が据えられている。一方、左右非対称なのは川原寺式・法隆寺式 (法起寺式) などであり、これらからは創建時の灯籠痕跡は検出されていない。

すなわち古代寺院において灯籠が一基据えられるのは、国分寺式の西隆寺も含め、中軸線が認識できる左右対称の伽藍配置に限定される可能性が高いと推測できる。

tab.4 古代寺院における灯籠遺構例

	灯籠基壇 基壇据付穴	時期	遺構の規模・形状など	伽藍における位置	金堂基壇規模	金堂基壇縁 ~灯籠心	金堂南面階段 縁~灯籠心	基準尺
飛鳥寺	有 有	創建時 (594年頃)?	方4尺の台座残存。中央に径1.6尺、深さ8寸の穴あり	中金堂・塔を通る中軸線上、中金堂と塔の間	東西70尺(21.2m)×南北58尺(17.6m)	6.7m (21.95尺)	5.3m (17.65尺)	0.303m (実測尺)
山田寺	有 有	8世紀には存在	径60cm、高さ15cmの凝灰岩製八角形台座と台石残存。台座の中央に径25cm、基壇に径15cm、深さ18cmの穴あり	金堂・塔・中門・講堂通る中軸線上、金堂と塔の間	東西65尺(21.6m)×南北55尺(18.2m)	7.2m (21.6尺)	5.6m (16.8尺)	0.333m
奥山久米寺	無 有	創建時(7世紀後半)? 廃絶は10世紀	1.5m四方の穴で地表下85cmに椽原石の板石が据わり柱状のもの抜取り痕あり	金堂・塔を通る中軸線上、金堂と塔の間	東西80尺(23.4m)×南北18m前後	7.2m (24.6尺)	6.05m (20.68尺)	0.2925m
来美庵寺(出雲)	無 有	創建時(7世紀末~8世紀初頭)?	東西1.2m×南北1.0mの灯籠基壇据付穴のみ	金堂中軸線上、金堂南	東西40尺(12.0m)×南北36尺(10.8m)	5.1m (17.0尺)	3.0m (10.0尺)	0.300m?
薬師寺(平城)	無 有	創建時(奈良時代初頭)?	東西1.7m以上×南北2.1m方形の基壇据付穴のみ(奈良時代瓦片が混入)	金堂・中門を通る中軸線と東西塔を通る中軸線の交点	東西99.3尺(29.4m)×南北61.7尺(18.3m)	19.5m (65.9尺)	17.5m (59.1尺)	0.296m
興福寺	有 有	創建時(720年頃)? 平安時代に据え直し	径約1.4mの花崗岩製六角形台座が残存。中央に径36cm、深さ50cmの穴あり	中金堂・中門を通る中軸線上、中金堂と中門の間	東西135.05尺(40.9m)×南北89.8尺(27.2m) (大岡英氏による現状実測)	8.3m (28.1尺)	5.2m (17.6尺)	0.295m?
播磨国分寺	無 有	創建時(8世紀中葉)?	直径2.4mの円形基壇 外装瓦敷き、掘込地業、径40cm、深さ1.2mの竿据付穴あり	金堂・中門を結ぶ中軸線上、金堂と中門の間	東西123尺(36.9m)×南北78尺(23.4m)	6m (20.0尺)	4.65m (15.5尺)	0.300m?
西隆寺	無 有	創建時?(1回は据え直しあり)	東西2.2m×南北2.5mの灯籠基壇据付・据付穴のみ	金堂・中門を通る中軸線から東へ1尺、金堂と中門の間	東西129尺(38.2m)×南北79尺(23.4m)	8.4m (28.4尺)	6.5m (22.0尺)	0.296m
東大寺大仏殿	有 有	本体は天平勝宝4年(752年頃) 基壇は鎌倉時代以前の再設置	基壇に版築	大仏殿・中門を結ぶ中軸線上、大仏殿南	東西97.1m(327尺)×南北61.2m(206尺)	24.6m (82.8尺)	21.7m (73.1尺)	0.297m? (天平尺=曲尺×0.98)
当麻寺	有 有	創建時?(白鳳時代か、天平時代は下らない?)	基壇は近年整備。基礎も近年モルタルで補修。竿・中台・笠・宝珠(いずれも凝灰岩製)は当初	金堂・講堂を結ぶ南北中軸線上	東西16.4m×南北13.5m	9.4m (?)	7.3m (?)	?

②金堂基壇規模と灯籠一金堂間距離との関係

灯籠遺構は、いずれも金堂・中門を結ぶ軸線上で「金堂の前面」にある。また中門はないが、現存する当麻寺の場合も金堂・講堂を結ぶ軸線上で金堂の前面に灯籠が配される。つまり、灯籠と金堂に何らかの関係があると考え、前掲の表 (tab. 4) からそれを模式化してみた (fig.24)。上段がおおよそ奈良時代前の金堂で下段が奈良時代の金堂である。図中の「灯籠一金堂間距離」は金堂基壇縁から灯籠心までの距離を指し、括弧で記した数値は、長方形基壇の長辺を1とした場合の割合である。

まず、奈良時代を境に金堂が大型化する点、さらに上段と下段でそれぞれの金堂基壇規模および灯籠一金堂間距離が類似する点が指摘できる。前者は奈良時代以降、より金堂を重要視する傾向が強くなったことを示している。実際、奈良時代前には回廊内に複数の金堂や塔が建てられていたのが、奈良時代ではこれらが回廊外に移されて別の区画をもつようになる場合が多い。西隆寺も奈良時代の他の金堂と同様の規模を持ち、金堂を囲む回廊の外に塔・講堂などを配置したと考えられる。

次に金堂規模と灯籠一金堂間距離の関係をみると、奈良時代前の場合は (来美廃寺は例外として) 0.31~0.33とほぼ近似している。一方、奈良時代の場合は割合が小さくなり0.16~0.22となる。この割合の違いは金堂の大型化と灯籠一金堂間距離の延長の割合が異なることが原因である。つまり奈良時代以降、金堂は約1.5~2.0倍の規模となるのに対して、灯籠一金堂間距離は約1.2~1.3倍しか長くない。ではなぜ同じ割合にしなかったかという点、灯籠の置かれた意味と関係しよう。灯籠はもともと「清浄な灯を神仏に献ずる」献灯の意味から金堂正面に置かれたと考えられる (福地謙四郎『日本の石燈籠』理工学社、1978)。したがって金堂からあまり離れすぎてもよくない。平城薬師寺や東大寺大仏殿の例もあるが、これらは金堂前面からの距離よりも位置を決定する別の要素が働いたためと想像する。ちなみに藤原京の本薬師寺では、平城薬師寺の位置で灯籠遺構は無かった。総じて灯籠は、西隆寺を含め、配置や意味の上で金堂と密接な関係をもつことは明らかとなった。

さて最後に、西隆寺の灯籠遺構が中軸線から1~1.2尺東に位置する問題だが、他に同様のずれをもつ遺構が無かったために解決できなかった。西隆寺の場合、金堂の基壇規模が確定しており、前述した条坊区画との関係も把握できる。一方で、ずれが施工誤差と断定できるかという点、伽藍の西半分がほぼ未発掘なことから、西面回廊の位置次第で伽藍自体に時期差がある可能性も残る。したがって、今後、これらの問題を再検討できる余地が多分に存在することを指摘して、今後の課題としたい。

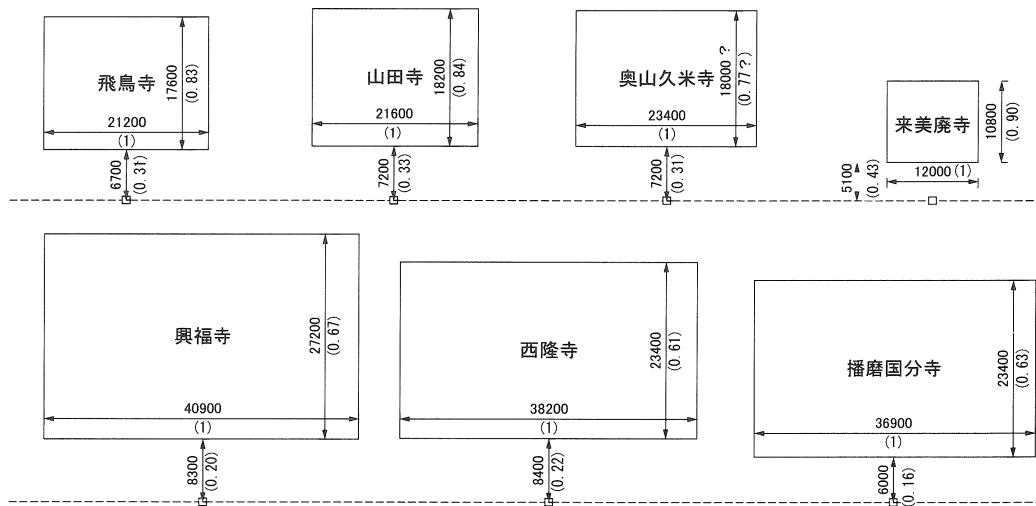


fig.24 灯籠・金堂位置関係模式図(単位:mm) 1:1000

### 3. 史料からみた西隆寺の成立と変遷

西隆寺の初見は、『続日本紀』神護景雲元(767)年8月丙午条で、従四位上伊勢朝臣老人が造西隆寺長官になり、9月辛亥条には従五位下池原公禾守の次官任命が見え、同寺の造営開始を意味する(以下、断らない限り史料は『続日本紀』)。これとほぼ同時に西隆寺の西に西大寺も造営される。宝亀11(780)年「西大寺資財流記帳」によると、西大寺は天平宝字8(764)年9月11日に孝謙上皇が、金銅四王像の制作と寺院建造を誓願し、天平神護元(765)年に仏像を鑄造し、伽藍を開いたという。9月11日は、恵美押勝の乱勃発の日であり、かつ四天王は国家を鎮護する仏であるから、西大寺は、押勝の鎮圧を祈願するためのものであった。そして押勝討滅後、重祚した称徳天皇と僧道鏡によって西大寺の造営が進められ、天平神護2(766)年12月には、天皇の行幸を迎えている(癸巳条<sup>(12日)</sup>)。

西大寺と西隆寺の関係を語るのは『東大寺要録』巻1で、天平宝字8年9月11日条に、西大寺の造営に続き実忠和尚の西隆寺別院建立が見える。「西大寺の別院としての西隆寺」の意味であろう(堀池春峰『南都仏教史の研究 下』法蔵館、1982)。僧寺の西大寺と尼寺の西隆寺の一体性が窺える。但し実忠の関与は、他の史料では確認できない。神護景雲2(768)年5月、押勝の越前国の地200町と、その娘婿御楯の地100町が西隆寺に施入された(辛未条<sup>(28日)</sup>)。西隆寺と押勝の乱の関連を読みとれる。同年7月、伊勢老人は修理長官を兼務した(戊子条<sup>(17日)</sup>)。以後、造寺司の機能は次第に修理司に移行したとみられる。

1971年の発掘調査で西隆寺東門地区から出土した木簡は、造営過程の一端を示している(『報告1976』)。税の荷札の出土から、国家的造営であることが窺えるとともに、南家(藤原氏か)が用材を進上していること、近衛府や修理司の官人などが智識銭を出していること、舎人工や斐太工らが属す工所という組織が造営に関与していることなどがわかる。また井戸の掘削や埋め戻しの役夫に糟を支給しており、造営以前の敷地内に井戸があったことを示している。西隆寺の敷地は、時代が下るが長承3(1134)年5月22日「大和国両寺敷地図帳案」(竹内理三編『平安遺文 古文書編』5-2302号、東京堂出版、1963)などにより、右京一条二坊九・十・十五・十六坪を占めていたことがわかる。

宝亀2年(771)8月、西隆寺に印が頒布されており(己卯条<sup>(26日)</sup>)、同寺は既に機能していた。また同9年3月、皇太子山部親王の病氣平癒を願って東大寺・西大寺・西隆寺で誦経が行われており(丙寅条<sup>(20日)</sup>)、その格の高さが窺える。その後、西隆寺の具体的様相を語る史料はほとんど無くなる。わずかに『弘仁式』主税・『延喜式』主税上に、越後国の出挙本稻として西隆寺料1万束のあることが見える。そして元慶4(880)年5月になると、西大寺に西隆寺を摂領させるという記事が出てくる(『日本三代実録』同月19日壬申条)。西隆寺の衰退を示すものである。六国史に現れる西隆寺は以上である。

鎌倉時代になると、建長3(1251)年「大和西大寺々領検注帳」(竹内理三編『鎌倉遺文 古文書編』10-7398号、東京堂出版、1976)によれば、既に西隆寺の地は田畠になっていた。この時代の西大寺の絵図にはかつての西隆寺の寺域も描かれる。時代が下り、元禄11(1698)年「西大寺伽藍絵図」に宝亀11(780)年12月29日絵図流記による伽藍の配置(PL.5)が、同年「西大寺古伽藍敷地并現存堂舎坊院図」には堂舎の礎石のみが残る姿が描かれている。いわば後者が現況図、前者が復元図である。発掘調査で確認された伽藍配置と前者には部分的に一致する点もあり、何らかの根拠に基づいて描かれたとみられる。しかし延宝9(1681)年開板の林宗甫『大和名所記』(和州旧跡幽考)では、西隆寺の跡さえ不明になっており、後者は現況図とは考えがたく、前者による想像図とみるべきであろう。